

3.11 を経済学・経済史はどう受けとめたのか

——方法の再考をめぐって——

ワークショップの経緯

今回のワークショップを開催した経緯について、簡単にのべておこう。

横浜国立大学大学院国際社会科学研究院経済系に所属している教員同士で互いの研究を報告・議論しあう場として、また、大学院生に対する教育の場として、ワークショップが定期的に開催されている。とはいえ、教員の多忙化もあって近年のワークショップは、教員が持ち回りで自分の研究を大学院生に報告する形態が多くなってきている。もちろん、そこに他の教員によるコメントが加えられたりと、少なからず教員同士での議論も存在するものの、報告者に対する質疑応答としての性格が強いように感じられている。そうした状況に対して、もう少し教員同士の共同作業、もしくは、共通の課題に対する議論を展開し、そこから何か新しい理解やアイデアが生まれまいかどうか、池島祥文と大門正克で検討しはじめた。

その結果、何か共通のテーマで二人、ないしは三人で報告しあい、そのテーマをもとに議論できればいいのではないかと、また、各教員の専門分野が異なることを前提に、共通のテーマを異なる分野から論じる過程で、他の教員を巻き込みつつ、そこから成果が得られるような工夫をしようということになった。

そこで、共通のテーマをどう設定するかについて検討した際に、ちょうど池島と大門がともに東日本大震災をめぐって宮城県気仙沼市・岩手県陸前高田市の視察を行っていたり、震災復興研究に携わっていたりしたこともあり、時宜的にも東日本大震災を取り上げることに決まっ

た。被災地の現状や復興政策の問題点を踏まえたうえで、経済学は震災復興に対して貢献できるのか、できていないのかどうか、お互いに自問自答していたこともあり、これらを共通の問題意識として位置づけ、ワークショップタイトルである「3.11 を経済学はどう受け止めるか——方法の再考をめぐって——」をテーマに決めたのである。

ワークショップのスタイルとしては、両者の専門分野から、3.11 を各分野がどのように捉え、どのような対応策を検討しているのかどうか、提起しあうという形式を採用している。池島は地域経済学の視点から、大門は経済史の視点から、震災研究を通じて経済学が抱える問題点を浮かび上がらせ、それぞれの学問分野にとって必要な視点を提起しようと試みている。また、同じく震災研究に携わっている長谷部勇一に、異なる分野から震災復興を論じる意義について、ソーシャルキャピタル論をベースにしたコメントを加えてもらっている。結果として、異なる分野からの応答ではあったものの、報告の結論はかなり共通した視点が析出されている。

ワークショップは2012年12月10日に開催され、多くの教員、大学院生の参加に支えられ盛況のうちに終了した。本記録はその時の池島・大門報告をもとに、その後の被災地の状況の変化等も必要に応じて加え、修正を施した原稿となっている。なお、当日は池島、大門の報告以外に、長谷部によるコメントおよび質疑応答がなされたが、本記録においては割愛されている。ご了承ください。(文責:池島祥文)